

被爆の実相を探る

考現学新聞

発行元

甲南高等学校

被爆地と当事者から学ぶ

我々はグローバル考現学の授業で日本に落とされた原爆について学ぶために広島を訪れた。この記事では、訪問した広島平和記念資料館の展示品と展示方針、またそこで同館の学芸課所属である落葉裕信係長に伺った原爆の資料に込められた遺族の思い、そして読売新聞広島総局で原爆報道を担当している山下佳穂記者に伺った世界の核兵器への認識の現状などをくわしく伝えている。（G考現学取材班A）



私はグローバル考現学の広島研修にて資料館を訪れた。資料館は国の重要文化財に指定されており、被爆の実相をよりくわしく訪れた人々に伝えている。ここでは、原爆による地獄絵図が再現されていた。

被爆者の遺品である「服」、被爆者の「遺書」や親族が被爆者に向けた「手紙」、被爆者の凄惨な姿を捉えた「写真」、きのこ雲の下で起きた事実を描いた「絵」など、約3万7000点が保管されている。

ヒロシマを報道する

信念を持ち、記事を書き続ける

読売新聞広島総局の山下佳穂記者は仕事に信念を持つ人物だ。

今年6月、「原爆の父」と言われた物理学者ロバート・オッペンハイマーの孫チャールズ・オッペンハイマーさんが来日した。山下

展示されているのは、この内の300点というごく少数である。1年に1回、劣化が進み続けてしまうという理由から、被爆者の「服」の展示は入れ替えられている。平和記念資料館は被爆者の遺書や遺品など当時を鮮明に感じることのできるもので、原爆の実相を身近に捉えてほしいと訪れた人々に願っている。（高三C組 前川 広充）



振り絞った言葉を伝える 被爆者の「叫び」

私たちは広島平和記念資料館を訪れ、2019年に完了した資料展示のリニューアルを担当した落葉裕信係長に取材を行った。

同館の展示の中央には、「魂の叫び」というコーナーが存在する。そこには、

の、母親と子供2人が発したと思われる言葉だ。そこには、結婚式で使用した着物の帯も展示されていた。これらの一言は、同館の職員の方々が、遺品の寄贈者に遺品への思いや人となり、被爆状況を聞きとり、記録したものである。「遺品は亡くなった人そのものの」という思いから、個人の姿が伝わるよう展示を工夫している。だが、遺品に関する問題もあるという。個人が特定されるという理由から、展示を遠慮したいという遺族の方もいる。

そのような課題もありながら、落葉係長は、他の職員の方々と協議を重ね、2019年のリニューアルオープンを実現した。努力が結果を生み、昨年の資料館の来場者数は、過去最多の約198万人を記録した。（高三B組 小山 晋和）

り続ける。メリハリをつけて取材に専念する。山下さんの取材のポリシーだ。

読売新聞広島総局の神谷次郎総局長には、原爆・核兵器に対する記者の視点からの考えを伺った。昨年の広島平和記念資料館の来館者数が過去最多となったことや、映画「オッペンハイマー」の大ヒットもあり、核兵器に対する意識が世界的に高まっていると語る。

（高三C組 田中 達也）



当事者の語る原爆

体験された原爆の事実

我々は広島研修の2日目、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れた。広島平和記念資料館の近くにあり、原爆による死没者の遺影と名前が遺されている。同館では、被爆体験伝承者の生田弘子さんと被爆者の切明千枝子さんからお話を伺った。本記事では、お二人のお話から、当時の生活や原爆投下後の様子、その後の生活、現代の戦争に対する意識の在り方について書いている。（G考現学取材班A）



伝承者としての思い

「被爆者のいない未来」に備えて

広島市の事業である「被爆体験伝承者」の1期生、生田弘子さんに、被爆者の方から引き継いだ被爆体験やご自身の思い、原爆被害の実態について聞いた。核兵器による初めての犠牲となった広島。現在の原

原爆は、人々の営みがあつた広島市中心部に落とされた。この一発の核兵器によって、そこには凄惨な地獄絵図が広がった。死のすぐ隣にある原爆の被害に遭いながら、今も証言を続けている被爆者の方々、そしてその人々の記憶を受け継ぎ、後世に伝えていくよう励んでいる伝承者の方々が存在する。現代や未来において、原爆が再び使用されることがないよう、その凄惨な威力を多くの人々に伝えている。広島平和記念資料館や、国立広

島原爆死没者追悼平和祈念館なども、原爆の記憶を未来に残すための取り組みの一つである。

この方々の活動だけで、核兵器の廃絶は達成されない。国籍や老若男女を問わず平和を求め、被爆者の記憶を未来に残していかなければならない。ぜひ一度、広島を訪れ、人々の話に耳を傾けていただきたい。（高三C組 前川 広充）



大きな犠牲と過ち 「日本のために」

15歳で被爆した切明千枝子さんにお話を伺った。切明さんは、原爆が投下される前の学徒動員の様子や、被爆後のご自身の心境についてお話をしてくださった。学徒動員では当時、「日本は神の国だ」「きっと神風が吹き、戦争に勝利する」と伝えられ、国家のために行動していたと振り返った。だが原爆投下後、目が覚めた。多くの仲間が目の前で亡くなり、街には死体が転がっていた。



「原爆は無差別の大量殺りくであり、大量破壊でもある」と生田さんは語った。生き残った者でさえ、悲しみを背負って生きていく。生田さんが体験を引き継いだ被爆者の方は、最愛の妹を亡くし、それは人生

被爆から年月が経ち、平和が訪れても、原爆の記憶は辛く、話したくないものだった。その考え方が変わった出来事があったという。切明さんは被爆後、子どもは産まないという約束のもと、愛する人と結婚した。原爆の被害を受け、放射線を浴びたため、子どもに障害が出るかもしれないと考えていた。だが、知り合いの内科医から「たとえ障害があっても、思いやりと愛情を持って育てるのが親の務めだろう」と言われた。そこで自身の考えを改め、子を産み、今では曾孫までいるそう。

切明さんは最後に、我々に言葉を送ってくださった。「平和は座っているだけでは訪れない。自ら行動して、手繰り寄せ、決して逃がさないでください」（高三B組 小山 晋和）

で最も悲しい出来事だったという。また、被爆者の人々は戦後、結婚の際など多くの差別を受けた。被爆者であることを隠して生活する人もいた。原爆は、社会の仕組みさえも壊した。被爆者のいなくも未来に備えて、被爆体験伝承者は今も毎年、市の研修を経てデビューしている。被爆の記憶を伝えているのは、原爆ドームだけではない。（高三C組 田中 達也）

80年後の広島で

考現学新聞

発行元

甲南高校

資料館に求められる役割

原爆投下から80年が経過しようとしている。多くの人々が苦しんだ広島は、今では国際的な平和のランドマークになっている。広島平和記念資料館で、石田芳文館長や落葉裕信係長に、資料展示や平和への思いについて伺った。

石田館長は冒頭、「皆さんに本身体験を語ろうとしたが、体調不良で叶わなかった被爆者の方がいる。核兵器のない世界に向けて尽力した人々の思いを受け止めて、被爆の実相に向き合っ

てほしい」と語った。その後、落葉係長から資料館の展示についてお話があった。資料館には、遺品などの被爆資料や写真、絵、音声データなど様々な資料が保管されている。焼けちぎれた服や熱線で変形した三輪車などの被爆資料は約2万2000点ある。

それらの中から、テーマに合わせた約300点が年1回のペースで入れ替えられながら展示されている。資料が寄贈される際、資料館は、寄贈者や遺族の方と面談をする。遺品の持ち

主の生前のお話や、寄贈に至った経緯を聞き取り、展示の説明文にしている。寄贈を悩む遺族の方々もいるが、「あの日の人々の状況を伝えてほしい」という思いから、寄贈につながるケースが多いそうだ。

遺族の思いを受けた寄贈品が、資料館の展示内容を深め、未来の平和に重要な役割を果たしている。（高三A組 伏見 優輝）

未来に伝える原爆

読売新聞広島総局への取材

私は広島研修の初日、読売新聞広島総局で3年目の山下佳穂記者にお話を伺った。「被爆者が生きて証言している『今』を記録し、生の声を記事に反映していきたい」と語る山下記者に、日々の取材や記者を

志したきっかけについて聞いた。山下記者は大学の神学部で平和を理念に持つ宗教について研究し、読売新聞に入社後も、原爆・核兵器や平和に関する記事を書きたいと広島総局を希望した。

資料館の工夫とこれから 三度の改修の意義

広島平和記念資料館の落葉裕信係長に、これまでの3回のリニューアルを通して資料館がどう変わったのかや、資料展示の工夫、今後の資料館のあり方について取材させていただいた。今年で開館69年になる

資料館には、これまで7700万人以上が来館してきた。2019年に3回目のリニューアルを完了し、客観的に被害を伝えるそれまでの内容に加えて、被爆者の姿や生前の日常、被爆後の人生について来館者がよ

り部の減少である。被爆者の平均年齢は85歳と高齢で、山下記者は、我々は被爆体験を聴くことができる最後の世代であると述べた。

昨年のG7サミットや、原爆を開発した物理学者オツペンハイマーの孫であるチャールズ氏に取材するな

ど、幅広く取材活動を行っている。その中で近年、課題となっているのが被爆体験の語

り想像しやすいように実物重視の展示内容に切り替えた。例えば、被爆時の写真と被爆者の絵を組み合わせて並べ、ケースに入らずに照明を工夫した展示も多くなった。傷ついた一人の姿が浮かび上がるように、学芸員や職員らは何度も展示のテストを繰り返した。私も資料館を見学した際、暗い中、効果的に照明が当たり、立体的な展示も多くあったので臨場感を感じながらあの日の惨状を学んだ。被爆者なき時代にどう備えるのか。落葉係長は私の問いに対して、「これまでの展示品はもちろん、写真や絵も活用しながら、今の私たちが変わらない日常の観的に被害を伝えるそれまでの内容に加えて、被爆者の姿や生前の日常、被爆後の人生について来館者がよ

山下氏の今後の取材として、活発化している被爆2世、3世の活動や、AIやVRを用いた被爆体験の伝承について取材を進め、若い世代にも記事を通して発信していきたいと話した。（高三A組 堀井 勢也）



語り継がれる想い

考現学新聞

発行元

甲南高校

若者による平和への役割

1945年に原子爆弾が投下されてから、その恐ろしさを語ることでできる国は、被爆国である日本だけだ。1976年に当時の荒木武・広島市長が被爆体験継承の重要性を謳って以来、原爆の恐ろしさと被爆

者の想いは語り継がれていく。我々は今回、15歳で被爆した切明千枝子さん、そして被爆者の体験を語り継ぐ「伝承者」生田弘子さんにお話を伺った。

切明さんは、学徒動員でたばこ工場で働いていた女

学校時代について説明してくださった。下級生たちは学徒動員で、爆心地に近い市役所周辺で建物疎開の後片付け中に被爆した。下級生の皮膚は焼けただけ、指先からぶら下がった凄惨な様子を語られた。辛い記憶から、80歳代になるまで証言できなかったという。

生田さんは、昨年のG7サミットに合わせて広島を訪れた各国の若者代表についても話された。彼らは原爆の被害を自国の政治家にも伝えたいと述べたそうだ。私たち若者が平和に果たせる役割は大きい。

（高三A組 堀井 勢也）

戻らない日常

結婚、就職 戦後も続いた困難

広島市では2012年から、存命中の被爆者の高齢化を受け、被爆体験伝承者養成事業を行っている。

一期生である生田弘子さんによると、あの日原子爆弾が人々の人生にもたらした影響は計り知れないもの

だった。被爆後、最低限の生活を取り戻した人も一定数存在する。しかし、被爆したことを隠しながら生きる人々も少なくなかった。

それには、就職や結婚などが強く関係している。「被爆者は長く生きない」「子どもに障害が出る」などの理由で差別を受けたのだ。さらに、生活を営むことが困難になった人々に対する

行政の手助けが、役所が破壊されたことにより十分に提供されなくなった。先に行きの全く見えない状況に



『声なき声』を

私達は生後2ヶ月で被爆した、生田弘子さん取材した。幼かったために当時の記憶はなく、自らの被爆体験は語ることができない。私たちが若者が平和に果たせる役割は大きい。

父は、生存が難しいだろうと医師に言われていたが、なんとか一命を取り留め、働けるまでに回復した。それでも片耳の聴力を失い、ケロイドに悩まされる人生を送った。生田さんも父の友人に助けられながら

直面した人々の中には、国鉄の列車に飛び込んだり、川で入水自殺を図ったりした人もいた。

「原爆や戦争は、家族を引き裂き、生き残った者は深い悲しみを背負って生きなければいけなかった。言いたいことも言えずに亡くなった人々を思い、若者の間でも、学びや考えなどを共有してほしい」。生田さんは我々にそう語った。

（高三A組 伏見 優輝）

